

焼き肉を探し求め、聖籠流しの街を爺とねねが行く

—第4代保護者のお話—

瀬田康司

1.

街路樹に電飾を施した煌びやかな世界。年末の大棚ざらえを目論んだ商魂の一大デモンストレーションぐらいの認識である。内的感情を正直に告白すれば、樹に電球巻き付けてピカピカさせて何が面白いの、とか、それを見上げながら人混みに背中をどつかれながら歩いて何が面白いの、とか、そんなところである。だから、そこへわざわざ足を運ぶ気持ちが起こることはまったくと言っていいほど、無い。そもそも、クリスマスなんて西洋人工宗教の行事でしょうが！、よしそれを受け入れるとしても、学校唱歌で教わったのは「サーイレン・ナイ(silent night)♪」でしょうがっ！ガチャガチャピカピカガンガン・・・いったい、どこが「クリスマス」ちゅうんじゃあ！と、にわかには、大和魂が湧き起こったり、「西洋文化全面受容主義」主義者に身を置き換えたりし続けてきた。まあ、クリスマス・イブが煌びやかで大音響であることを我が日本国以外の、まさに地球の反対側で「発見」して以来、我こそ「西洋文化全面受容主義」主義者だと思っていたところの「西洋文化全面受容主義」とはステレオタイプ視そのものであることを思い知らされたので、なに、その、ですね、「まあ、クリスマスという名の各国文化行事というのは存在してもかまわないですねー」程度にはトーン・ダウンはしているここ数年ではある。とはいえ、我が身そのものはクリスマスとは身を離していることは事実である。その証拠に、プレゼントは有難くいただくが、プレゼントをすることはあり得ないのである。

ところが、である。去る師走の20日、今年最後の整体操法を受けに青山に行った時のこと、「表参道のイルミネーション、街路樹保護のために、枝に飾り付けるのではなく、据置型にするんですって。」と、姫さまにご案内いただいた。据置型とはどのようなものか。全体の帰路、姫さまと、表参道まで足を伸ばしてみた。だが、樹にも路上にも、煌びやかさを証すものは何もない。

「まだ早いのですねー。イヴあたりに来てみますか。」(姫さま)

2.

姫さまは職場におけるただ一人の保護者である。ぼくが姫さまの保護者なのではない。ぼくを保護しなくては心配で仕方がない、という精神と行動ーぼくにとってすれば大変ありがたいーの持ち主が姫さまなのである。これを社会常識的に言えば、失礼ながら、特異というか、奇特というか、物好きというか。一緒に並んで歩く姿を他の人が見れば、「まあ、あのお嬢さん、溝におっこっていた爺さまを拾ってあげているのね」ということになるのだろうと思う。

ぼくがこの職場に着任して以来、姫さまのように、保護者役を務めて下さるお嬢様方にはじつに縁がある。そして、その、保護する精神と行動には、次第に深化変革がなされて

いるのだなあ、としみじみ思うのである。

初代の保護者達は、ぼくをG学院という職場環境に馴染ませるべく、徹底した洗身、洗脳を行ってくれた。彼女たちは、それぞれが、××家から民間に身下げなされたかの人や××家に身上げなされたあの人と同級生ということもあり、彼女たちが為すべくへの教化訓練は鮮烈さを究めていた。学問上のことと言えば「翻訳というのは横を縦にするだけではだめですよ、縦文化として再生させなければ」と洗身してくれたし、階級論に関して言えば「××家というのは、それはそれは、国民に平等に向かうということに神経を使っているのよ。同級生全員、漏れなく、お呼ばれされるの。出されるおやつはカップエビセンね。」とぼくを洗脳してくれたし、差別論に関して言えば、「女に性欲がないなんて言う奴はどこのどいつだっ！」と、サラリーマン諸氏が上司・同僚の悪口で憂さを晴らしている安居酒屋で、日本酒をコップであおりながら叫んでぼくを開眼させてくれたーこれを一般に、眼を剥く、と言うー。

第2代の保護者達は、アッシー君、ミツグ君、えっとそれからなんだっけ・・・とりかえばやものがたりではないし、本命ではなくて担保しておく、身代わりじゃないしなあ、・・・キープ君！等々、まったく新しい言語感覚シャワーを浴びせてくれた。またその行動も実際にして見せてくれる。彼女たちは、「彼女」や「彼氏」に二通りの発音があるなんて世の言語学者達、音韻学者達が記録化するのに困るだろうような新しい文化現象を、毎日の如く、これでもかこれでもかと、ぼくの前で語り合っていた。研究対象としても面白い存在だったと言ったら失礼なのだろうけれど、ぼくの青年期論の一部を構成してくれたことは間違いない。ある年のこと、「クリスマスと一緒に過ごす彼／彼女がいない人生は死んだと同じ」という迷フレーズが語られ、ぼくは彼女たちに引きずられて一文字通りー、12月24日の夜、イルミネーション原宿を散策し、イタメシを食させられたのだった。

第3世代の保護者達はバブルがはじけてしまった世代と言うべきか。ただひたすらぼくの研究室で、連日、語り、語り、語り・・・この世代では「匿名性」がテーマであった。「実名的存在として如何に終生生き抜くか」。中等教育で管理教育を受けた経験者であり、その中で生き抜くことは自分を隠し続けることでしかなかったと語っていた。彼女たちからすれば、その頃からぼくが管理教育的な方向性を強めはじめていたので、これは何とかしなければいけない、と危機感を持っていたのだろう。ぼくがぼくの教育学史を本格的に語りはじめた世代であり、学問的な意味での保護者の創生の世代でもある。この世代とは「修学旅行」としてディズニー・ランドでおそろおそろ遊んだのを思い出す。わし、あれ、きらいやし。

そして、第4世代の姫さま。第3世代がぼくの教育学の継承・発展であることを知っている姫さまは、「私はどうしても先生の本を出したい。」と言ってくれている。まことにありがたいことだ。姫さまの世代とはわいわいがやがや、訳の分からない、談笑プールたる我が部屋で時を過ごし、ごくたまーに、「古代の旅」なんてものを試みるがあったっけな。そうそう、セガン研究や近藤益雄研究に苦しんでいる姿をナマで見られてしまってい

る。ぼくは基本的に、学問中の姿を他人様に見せないタイプなのだけれど。それというのも、それらの研究の発端をぼくに強要した人の性急かつ強権的な圧迫によって、どこでもどのような場であっても、学問をせざるを得ない状況に置かれたからだった。

3.

12月23日、街の空に澄んだ青がほとんど残らなくなった頃、ぼくと姫さまは原宿駅ホームに降り立った。まず渋谷方面の改札をめざして歩き始めたが、先に見える歩道橋はほとんど人が進まない状況にあった。姫さまはかの花火見物での歩道橋事件を寸時思い浮かべていた。それではと、向かう人が少ないように思われた新宿方面の改札をめざしたが、こちらは地下に潜る。ホーム中程で、すでに人の群れの歩みが極端に遅くなっていた。この人々すべてがイルミネーションを求めているのだろうか。思いのほか中高年の姿―彼らはなべて、地味である―が目立った。もともと、摩訶不思議な衣装―たとえば、姫さまにぼくが語った言葉そのままを表現すると、「スカートの下からヒラヒラのついた長い白パンツを覗かせている、まるで近世ヨーロッパの(男性)衣装。」―の若者の姿も目立ちしたが。

原宿界隈の大通り名は何というのだろう。地下鉄は明治神宮前という駅。道の両側の並木の歩道に、姫さま曰く「まるでお墓みたい」という形状の物体が10メートルほどの間隔で立てられている。磨りガラス状の側面からゆっくりと色を変える電光が漏れてくる。ぼくは、お墓というより、精霊流しを思い付いた。道路という川に沿って精霊が流れていく。ビルの上から見るときつとそのような光景に違いない。光も押さえられていて華やかさを感じることが出来ないからだ。いやいや、それじゃお盆じゃないか、これは地元の人々のしゃれかもしれないな、聖なる灯をニッチならぬ籠に入れ、聖夜を過ごしましょう、と。原宿、イヴ、イルミネーション。この三点セットでインプットされているぼくの心象風景は「煌」の一文字以外にはなかった。だから、精霊流しならぬ聖籠流しには物足りなさを感じたのは正直なところである。街路樹(欒と公孫樹)の保護のためにと考えつかれた聖籠ではあるが、その街路樹の日常環境たるや夥しい数の車列が吐き出すガス。人間にとって猛毒ではあっても欒や公孫樹にとってはそうではないらしい。そんなに強い樹木も人間の手にかかるとひとたまりもないということか。この「街路樹に優しい」新しいイヴ文化は定着していくのだろうけれど、しばらくは評判が悪いだろうな。刺激文化に冒されているのだもの、ぼくたちは。でも、ぐっと光源を押さえた風に見える聖籠も、じつは、裸電球を木枝にぶら下げるこれまでのイルミネーションと、使用エネルギーは変わっていないのだろう。目の前の環境に優しくする振りをして遠くの環境を破壊するのが得意な我が文明社会のやることはそんなところだ、としか思えないぼくは悲しい存在なのだろうか。

おやまあ、これは見事、というか、煌びやか！何のビルだかはしらないが、その前に飾られた大きなイルミネーション・ツリー。携帯カメラを構える人の数は、やはり群を抜いて多かった。ぼくもパチリ！昨夜、つまり12月22日、浅草において臨時の「浅草もんじゃの会」を開催したお相手の貴婦人にメール送信。面白いご返事をいただいた。タイトル「いいな、いいな」、本文「どうしたの？つるびんのもっとも嫌いな原宿、それもイルミネ

ーションー さては、援交？ 爆 やっぱりピカピカきれい！ ぶー 笑」

じつは、姫さまに、夕ご飯をご一緒しましょう、ぼくは焼き肉が食べたい、と申し出ていた。このところの忙しきで体力がかなり落ちているのを感じていたからだ。姫さまは、私は野菜が食べたい、あまりおなかが空いていないと何度か返してきた。感度の鈍いぼくの頭であっても、こういう時はやはり、ご一緒したいという申し出を撤回すべきだ、とは考えた。考えはしたが、聖籠の流れに沿って歩きながら、野菜も食べられる店、一人があまり食べなくても許される店、それはすなわち焼き肉の店、との公式の元に、目線をビルの看板に走らせた。

幸いなるかな、姫さまも同じ行動を取ってくれた。だが、

「ありませんねー。」(ぼく)

「せっかく焼き肉を食べる関係になろうというのに、だめですねー。」(姫さま)

その道すがら、いろいろなビル、店のご案内を姫さまからいただく。その中で印象に残っているのは SMAP/SHOP と新潟物産展。前者は臨時の出店だそうで、パリでの通訳氏がいたら大喜び兼大騒ぎになったことだろう。店構えについては、SMAP が赤、SHOP が青の、重ね書きをした商標(?) がいくつもいくつも書かれていたことと、「チョコレート、売れ切れました」という張り紙しか印象に残っていないが、ずら〜りと人列が作られていた一何かが売られていたのだろうか。後者には覗き込んだ。お餅が美味しそうだった。

地下鉄表参道駅あたりに来ると、もう、ぼくと姫さまの頭には「焼き肉」の文字しかない状態になっていた。表参道駅から青山学院の方に折れ、そのまま真っすぐ渋谷に向かって歩み続ける。もちろん、目は「焼き肉」の文字探しを努める。

無い。それにしても、「韓国」の文字も「焼き肉」の文字も、全く無い、のである。トラフグの卵巣の塩漬けを食べさせるフグ料理店の前で思わず足を止めた。あの卵巣の味！もう焼き肉でなくてもいい、この懐かしい味の店でもいい。だが姫さまは、心乱されることなく、焼き肉を探し求め続けてくれていた。ちゃんと、「フグの卵巣？ 魅力的！」との外言を発しておられるのだけれど。

「焼き肉を食べる関係になる二人はいらないのかしらね、この界限。」(姫さま)

渋谷駅近く、道が二またに分かれる。その一方の道路に、木枝に電飾を施したイルミネーションが続いて見えた。「この道を進めば焼き肉屋に行き当たるだろう、きっと、きっと。」だが・・・。

とうとう渋谷駅に行き当たった。「池袋に出ます？」姫さまは、さらなる界限に焼き肉を求めようという意志を示してくれるのだが、ぼくの忍耐はそろそろ切れ始めていた。ラーメンでも、うどんでも、お好み焼きでも何でもいいなあ。そんな内言をつぶやきながら道を右手に折れる。ほんの少し歩みを進めたものの諦めて駅方面に戻りはじめた。と、姫さまが身をかがめて怪しげな看板の文字を指でなぞりはじめたのではないか。しかも、その看板の向こうは奥まっており、見た感じでは集合ビルの入り口である。ぼくのさび付いた感性ではどう見てもそこは風俗関係の入口。秘密の館なのである。しかし、姫さまのなぞる

指の先は「〇火家」という店名の他に、カルビ焼き、ロース焼き等々、求め求め続けた焼き肉名が見られる。姫さまは、迷う心など少しも見せず、その秘密の館への入り口に向かっていき、ぼくはその後を、おどおどと、ついていったのである。

4.

店のドアを開けると目に入った光景はバーそのものである。調理場では、若く、優しい顔つきの店員—イケメン—達が手をせわしなげにしていた。案内されたカウンター席にはすでに先客が数人、カウンターと調理場とを和洋酒の瓶列が境界を作っている。しゃれた雰囲気と言いたいところだが、ぼくはこういう店にはまったく馴染みがない。きよろきよろと店内を見渡すことで気を落ち着かせようと試みた。さほど広くなく、カウンター席はせいぜい10人程度、テーブル席とあわせて、この店の集客数は30人程度であろう。南フランスの小さな都市の穴蔵レストランを思わせてくれる。その感覚によって、このまったく馴染みのないやや高級そうなバー風が、フランス風で言うところのバーに思われるようになった。さて、腰を落ちつけて、美味しくいただくぞ！

すぐに、炭火が熾っているコンロが運ばれ、ぼくと姫さまの前に置かれた。カルテから、上カルビ、上ロース、上ミノ、野菜焼き、それと、キムチ盛り合わせを注文。それらを、まさにほっぺが落ちるようなおいしさを覚えながら食べ終えた後、ユッケを追加注文。最後に、ぼくはカルビクッパ、姫さまはキムチとナルムの混ぜご飯をいただいた。肉片の特徴はといえば、上品な表現ではないが、薄く切り揃えられた焼き肉しか味わうことのないこの身からすれば、おおざっぱという表現が適切であろう、厚切り乱切りの品々。優しい炭火の上でそれらを炙っていただく。絶品。甘みが口内でとろけ出る和牛、宮城牛である。

焼き肉をほおぼりながらも、姫さまとの会話は続けられる。姫さまのこれからとぼくのこれから。ぼくにとって姫さまは保護者である。その保護者も新しい人生の道を選ばなければならない時期にさしかかっている。「私の後継者を捜さなきゃ」と、ぼくにとっての第5代保護者を心配してくれている。新保護者が見つからないなら、とまで考えてくれてもいる。その考えが姫さまの人生の前進を意味するものであるのならば、まことにありがたい話。そうでないのならば、「大丈夫、爺は一人で、生きていく」。

溝に落ちている爺を拾い上げ一緒に歩いてくれる保護者が、歴代いる。ありがたい大学生活ではないか。こんな発見を改めてさせて貰うという、素敵な素敵なクリスマス・プレゼントをいただいた。来年こそは、ぼくの方からプレゼントをして差し上げなくてはならないと思う。

— 第4代保護者の後継は育っていない。育ちかけたと思われたが、誰もが自分のことで精一杯のご時世、むしろ、ぼくが「まとめて面倒見ましょうぜ。」というのが現状である。

いや、爺が成長しております、姫さま、とお伝えすべきだろうか。ぼくの部屋は今日も若いお嬢さんたちのキャピキャピの響きが轟いている。—